

【傷のあとに使用される薬】

ふつうヒトの皮膚は、傷をうけても軽い傷であればほとんどの場合は、元の皮膚のように治りますが、大きなけがや、やけどなどその傷の程度、傷をうけた場所、傷を受けた本人の体質によって治り方（経過）が違ってきます。傷が治ったにもかかわらず、瘢痕（=きずあと）の部分が盛り上がり、痒み、痛みを伴う状態をケロイドや肥厚性瘢痕（ひこうせいはんこん）と言います。ケロイドは隆起や硬さ、赤みなどが持続し、当初の傷を受けた範囲を超えて大きくなりますが、肥厚性瘢痕は多くの場合時間とともに落ち着き、その範囲を超えて大きくなることはありません。

ケロイド・肥厚性瘢痕の治療に使われる薬剤には内服薬、外用薬、注射薬などがあります。

内服薬（リザベン）は、ケロイド・肥厚性瘢痕症状の悪化を抑えたり、痒みや痛みといった自覚的な症状を改善したりするタイプのお薬です。より確実な効果を得るためには、傷あとが異常に膨らみ、痒みや赤み、痛みが出たら、できるだけ早い段階から服用し継続することが大切です。副作用としてまれに排尿の回数が増える、排尿時に痛みを伴うなどの膀胱炎様症状があります。

外用薬や注射薬にはステロイド剤（副腎皮質ホルモン剤）という種類のお薬を使用します。外用薬としてはステロイドの入った軟膏やテープ剤が用いられています。注射の場合はお薬がからだ全体にまわるので、炎症や痛みを抑えたりする効果も強力ですが、副作用も外用に比べて強く、頻度も高くなります。長期間にわたる治療が必要となる場合もありますので、何か気になる症状などが現れた場合は医師に相談してください。

（薬剤師 吉富 久徳）

【傷の治りに関わる微量元素】

最近になって重要性が見直されるようになった微量元素（ミネラル）があります。傷の治りを促す作用を持つ「**亜鉛**」です。亜鉛は300以上もの生理活動に関与し、傷の治りの他にも味覚や食欲、免疫活動、男性や女性の生理機能やアレルギー、肌の健康、褥瘡（床ずれ）、脱毛などにも広く関わることで知られています。

亜鉛を豊富に含む食品には、**牡蠣（かき：オイスター）、抹茶、数の子、ココア、きな粉、いりごま、小麦胚芽、豆類、カリフラワー、アボガド、ナッツ類**などが挙げられます。様々な食品から体内に入った亜鉛は、吸収されて使われますが、インスタントラーメンや小麦に多量に含まれているフィチンという成分は、亜鉛の吸収を妨げます。逆に、ビタミンAやカルシウム、リンと一緒に摂ると良く働くといわれています。また、閉経後の女性やお酒を飲み過ぎる人は、尿と一緒に亜鉛をたくさん排泄してしまい、亜鉛不足になりがちです。高齢者も亜鉛の吸収力が落ちてきます。サプリメントで補うことも有効ですが、摂りすぎるとかえって免疫力が低下し、貧血や吐き気、下痢を起こすこともあるといわれていますので注意しましょう。自然食品から摂ることを心掛けましょう。

（管理栄養士 尾上 陽子）

くす通信

第77号
2005年10月1日

傷の治療について 傷のあとに使用される薬 傷の治りに関わる微量元素



くす（樟）は常緑の広葉樹で、熊本城内に多く見られます。種々の精油成分を含み、良い香りがします。樟脳をはじめ色々な薬用成分が抽出されるなど有用な薬用樹でもあります。また、くすし（薬師）とは、医師のことを指し、くすしぶみ（薬師書）は医学に関する書物のことを言います。本紙はこのくすにあやかり、健康な生活を送るために情報を提供します。気楽に読んで健康を守りましょう。

診療時間 8:30~17:00

(診療受付時間 8:30~11:00)

ただし、急患はいつでも受診できます。

(診療科目) **総合医療センター** [総合診療科、血液・膠原病内科、内分泌・代謝内科、腎臓内科(腎センター)、神経内科(脳神経センター)、呼吸器科(呼吸器センター)]
心臓血管センター (循環器科、心臓血管外科)、**消化器病センター** (消化器科)、精神科、神経科、小児科、外科、小児外科、整形外科、脳神経外科(脳神経センター)、皮膚科、形成外科、泌尿器科、産婦人科、**感覚器センター** (眼科、耳鼻咽喉科)、気管食道科、リハビリテーション科、**画像診断・治療センター** (放射線科)、麻酔科、歯科・口腔外科、**救命救急センター**、人間ドック、脳ドック

診療科の特色：形成外科



形成外科がどのような診療をする分野であるかを簡単に表現すると、「形を造る」、「形を治す」、「形を変える」診療科であるといえます。すなわち

①先天異常、2次的変形などの異常な形態を正常な形態にする**(形を造る：形成)**。

②外傷・熱傷、腫瘍切除後などの組織欠損の修復、原状回復をする**(形を治す：再建)**。

③正常な形態をさらに美しく修正する**(形を変える：美容外科)**。

という3本柱があり、体表の形態異常、外傷全般の診療を幅広く行っています。

患者様は手術希望の方が多く、その要望に応えるためオーダーメイドの医療を目指しています。

【傷の治療について】

秋はスポーツの季節であり体育祭・運動会などでスポーツを楽しむ機会が多くなります。体育着では素肌を露出する部分が多くなるため、なんらかの原因で怪我をした時身体表面に傷をつくりやすくなります。ここでは傷をつくってしまった時の初期治療について基本的なことを説明します。

一概に傷と言っても種類は様々ですが、①擦り傷(擦過傷、挫創)、②切り傷(切創、刺創)、③咬み傷(犬咬傷)、④やけど(熱傷)などに大きく分類されます。傷の処置、治療はその原因や状態によって異なりますが、大まかには、①③のように異物や細菌感染をとまなう汚い傷、②④のように無菌に近いきれいな傷に分類されます。

汚い傷の場合は傷を十分洗浄して異物や細菌を取り除き、殺菌消毒薬を用いて傷を清潔にする必要があります。組織の挫滅が強い場合や、**犬咬傷**などではこのほか感染をとまなうことが多いため、縫合はせずに開放創としておき、傷が深い場合には感染が落ち着いてから二次的に縫合の方が安全です。どうしても縫合が必要な場合は粗に縫っておき、排膿できるようにしておきます。一方**刃物による切創**など鋭的な傷は比較的清潔なので、十分に消毒したうえで止血し、一次的に縫合して創を閉鎖します。縫合した場合、よく抜糸の時期は一週

間後といわれますが、顔面、頭頸部、体幹、手足など部位によって異なりますし、どのように縫合されたのか(傷にかかる緊張は?、中縫いはしてあるか?……)によっても異なります。一般的には、顔面、頭頸部で5-7日、手足、特に関節部などでは10日ぐらいが目安になります。

熱傷は今まで説明してきた傷とは大いに異なり、熱湯、火などによる皮膚の熱損傷です。紙面の都合上詳細は割愛しますが、もしやけどをしてしまったらまず水で十分に冷やして下さい。皮膚がヒリヒリして赤みをともなう程度でしたらステロイド外用でよいのですが、範囲が広い場合や水疱をができてしまった場合は専門医を受診することをおすすめします。

(形成外科医長 大島 秀男)

国立病院機構熊本医療センター

(前 国立熊本病院)

NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION KUMAMOTO MEDICAL CENTER



〒860-0008 熊本市二の丸1-5

電話 096(353)6501(代表)

FAX 096(325)2519

ホームページ <http://www.hosp.go.jp/~knh>